

呂  
1368  
卷 1

隊務其開序例



寛政五年癸丑の冬我仙臺の舟子等江左  
運送の程を載て凡十月廿七日に於て  
壯嚴なる巻塔を閣下にて製成りて  
海上運成りて其の海中に沈みし事  
の憂六月初七日梅北の御堂に於て  
いふ所を傳へし事  
舟西之國より行存する事



環海異聞序例附言

寛政五年癸丑の冬我仙臺の舟子等江戶の  
 運送乃糴カヒミキと載せし十一月廿七日をけ舟を  
 牡鹿郡石巻港カヒミキに開帆して奥州山城の  
 海上運送乃糴を以て洋中を漂ふに及日翌甲寅  
 の夏六月朔旬極北の僻島カヒミキとテレーツケと  
 といふ所を漂ふに及  
此島北西墨利加洲に  
 係る諸島の一とす 此地近時  
 魯西亞國より併有てる所を在留の



中國人源あり等を憐んで接養を加ふ依て  
是とありふあむより十箇月解盟乙卯四月  
初旬本玉船回棹の使を以て源人等とも内  
地と連れ送り是六月下旬「オホーツカ」といふ湊  
小島岸す 本領の北南向すあらの盡境 此處に  
在ては顯目の款待あり遇ひは秋八月より翌  
丙辰夏秋の交に到りてふたつを散す同月  
十五人おきてこち度にお立ち川前程「オホーツカ」

等の諸地を経て極百里の旅行西南におむりて  
イルコーツカ 西地は西細西沙ふ といふ所ふあむ同程  
漸くありおるありは地縣吏の接養を得て満る  
すより凡つ八年丙辰は年より享和二年癸亥  
の暮におりしは三月本玉の帝都「ペトルブルカ」  
といふ所より源あり等上越乃王命下りしを  
辞しより數千里の行途「ムスクワ」 莫斯哥と  
いふ舊都 度數譜云北極出地五十五度一十  
五分東西經度五十七度一十八分 等を経て

北緯しそ四月の末新都下ふるす 度敷譜曰 新都べトル

ブルカ北極出地五十九度五十六分 東西經度四十六度五十二分 國老の志を客館と

し教日滞留せざるの間厚き款待あり日酒食

を安排し衣服皮褥を賦與しきとれ乾慾ふ

奔走し國王一日謁見をもゆるし都下の二見

等ふいさるすて 殊す所なく此算彼國我

日本に使節を遣わすその六月の末叢帆の

使舸を以て漂客津太丈儀平左平太十郎の

四人を護送す本船を本領の要港カナスダと

いふ所より開帆し弟那瑪尔加國ふ船を泊りて

諸用を弁ししより諸厄利亞國の一港ふ登り

洋船 兩國共ふ歐羅 大を出さし 加那里亞島 其地

亞弗利加沙小係る所謂福島 天度の初度とある所あり 小島に存五六日船を留む

より赤道直下を經るに南亞墨利加洲

伯西兒ふ船滞る數月翌文化元年甲子の

歲に大洲を廻り針路を西よりマルケイサ

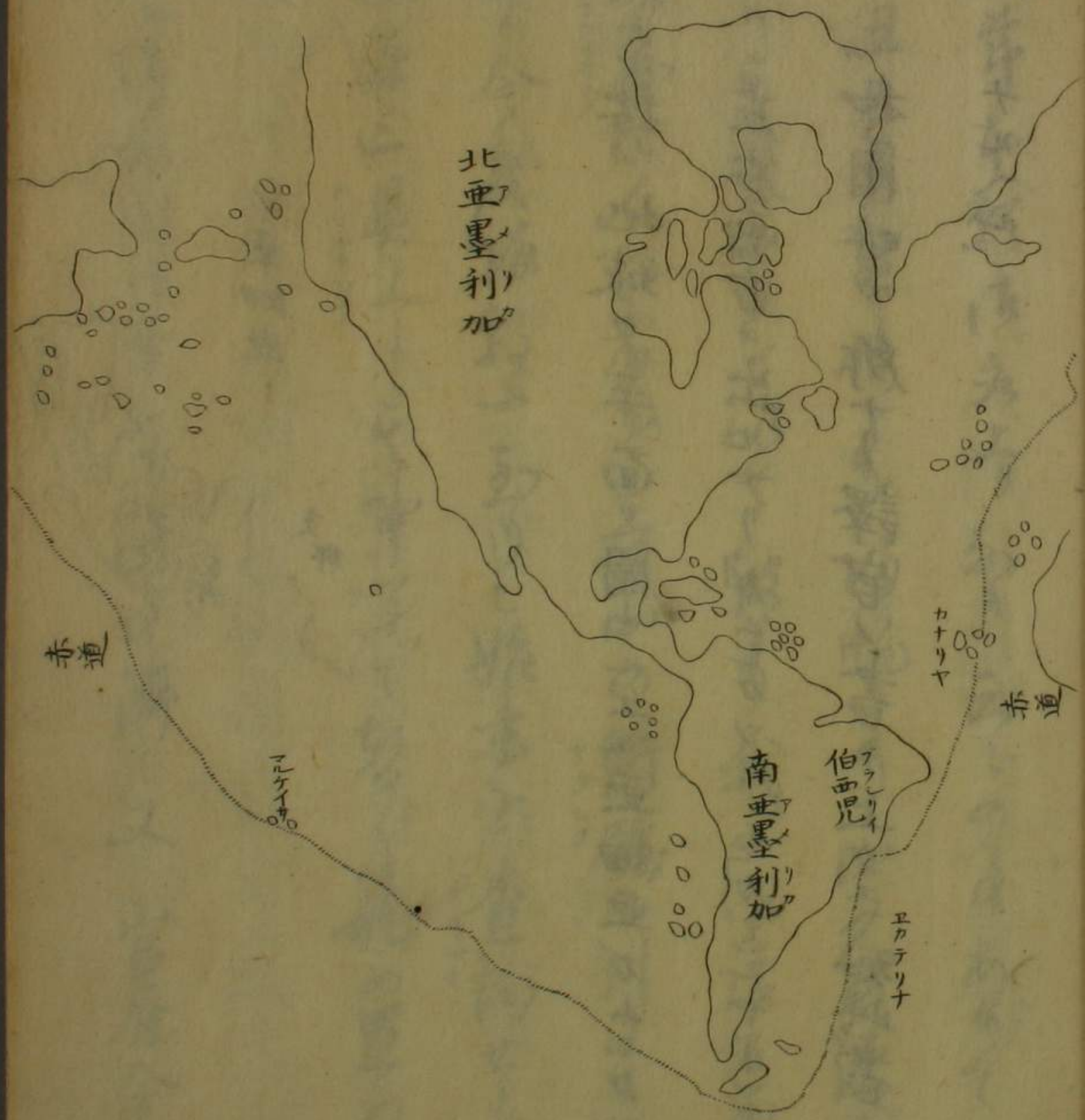
亞墨利加西海中アメリカ 西の僻寄なり 碇小船を寄せ暫く日ありて復  
西の距りて再い赤道直下の海上を渡りこれ  
より又サンペイツケを歴たるとより北してアヒメ 亞細亞  
洲東北の盡境カミシヤーツカ といふ所を碇  
たれ彼至近東に所有とありけ地ありけあり  
洋の數日其秋たるとリヨラズ 船後を南より  
我蝦夷地の沖より 本邦の南洋を走りて  
其九月六日肥前國長崎浦にニホニ 碇す 癸亥  
六月彼國を發帆して 甲子九月長崎へ碇  
するを 癸亥二箇年月を十六ヶ月なり

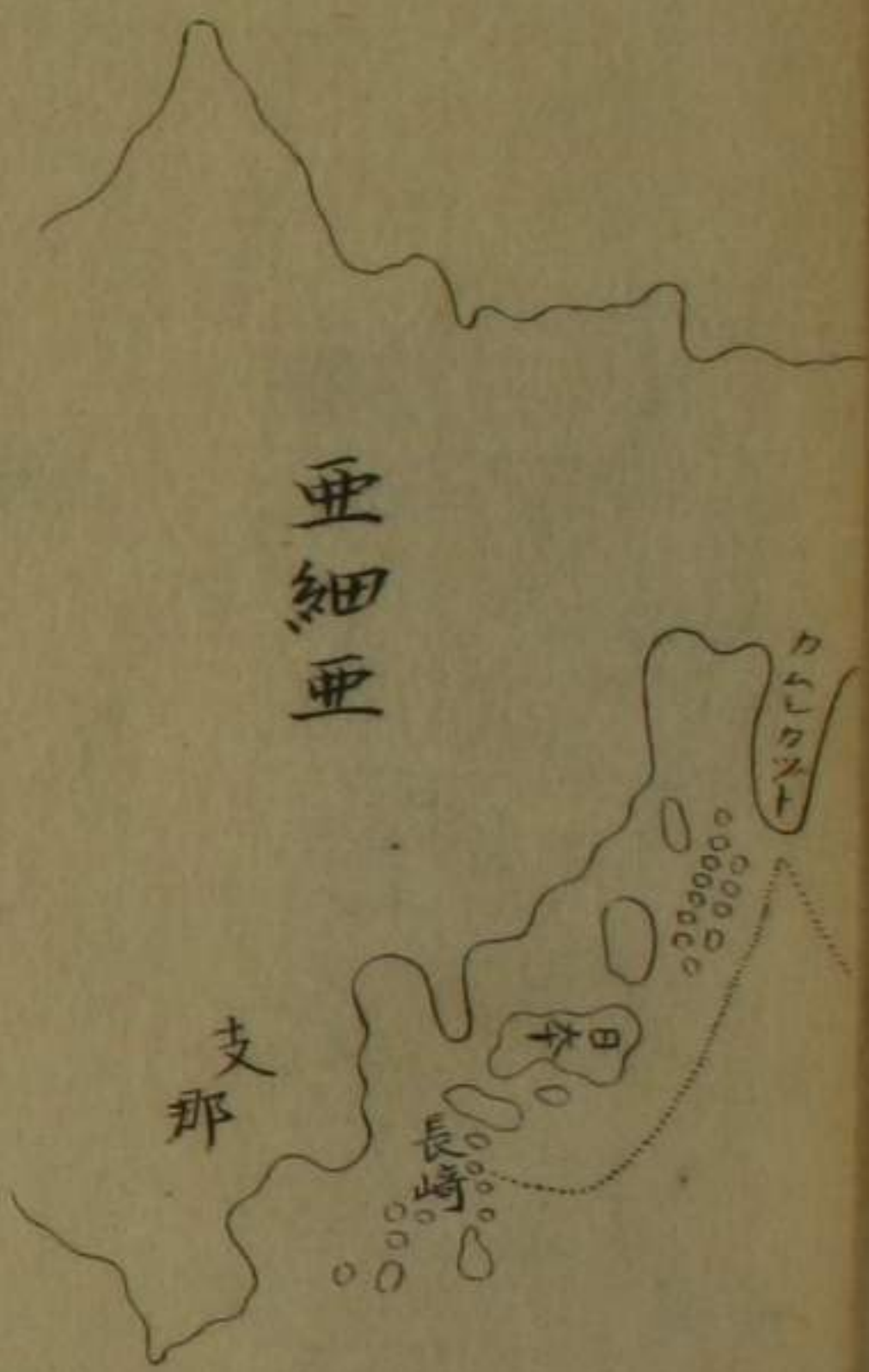
魯西亞使節船

本朝に渡海せし船路於長崎書事上げ

しるし畧圖

舟行の道筋を示すものありて大海をあり  
たるを大約の略繪圖と名ゆ





按=地球ヲ平面ニ圖セルニハ亞細亞カムシカツト

左右兩方ニ出ルナリ「カムシカツト」ハ「カミシヤーツカ」ニメ

和蘭呼フ所ナリ譯官ノ書キ上ケテハ如此書セル

ナルヘシ

使節本影此書上ケル云々の事ありて彼船

乙丑三月廿七日より海航せり四人の源ある等

乙丑三月十日を以て彼より我より復るありしを

鎮藩口人の者を立テ山の街廳より引きて源流

より今度海航すありし始末を查詢せしる所

後再三具上しし事了つて暫く籠め置れし後

我

公は法為問の事ありける濟て又官府令を下し



四人の者を長徳より迎へよとて使へしとす於て  
其季秋平井窪田等の諸臣とて江戸を渡り  
西犯し向てしめ侍従より受取て東歸す同冬  
十月の末忌府日ありて一日芝郎意下  
おるに控し申應と問をいぬる微臣大槻茂質  
志村弘強

公命を奉りて其事を略し尋問して大略を  
明かせしと後名列位の諸大夫お議して

内命二臣お下りし其始末の詳細を問せしとす  
於て其月盡りて起し愛宕下別邸の一舎お召  
しし目録問紀問をあせり茂質其漂泊游歴  
の次第を述べて問を起し弘強侍りて筆記す如  
け其多し凡そ四十餘の是事を載して其二月申  
旬及び暇を賜つて本府より發するの帰期お  
至るを不終り彼土往來滞在松武箇年の際經  
應せし事記を問出せり茂質

一は紀聞愚陋無識の雜民等彼魯西亜本地不  
今日留帆せる海路の如きも徒らふと女見妄閑  
する所ありてこそ得審と爲す味滴あるもの  
多しとれ也<sup>止</sup>と得ざる可也 茂策 其次テを  
以て問と緊要あるもの記せ、更ふられと答ある  
及るす字ふ靴<sup>ツク</sup>と隔<sup>カニキ</sup>と擽<sup>カ</sup>くりぬき<sup>ニ</sup>の毎  
少くす成ふ唯<sup>ハナシ</sup>と臆<sup>ハナシ</sup>化<sup>ハナシ</sup>して説話せるを雜  
録せるなりナリ

公命を疎漫ふするふ 似たりとしやも 為方事<sup>セシカタ</sup>所  
なり且も説く所解す<sup>ハナシ</sup>と解す<sup>ハナシ</sup>と又解す<sup>ハナシ</sup>  
ふ似て殆ど筆舌の及らざるあり故に百問人  
某畫<sup>コト</sup>るもの意<sup>コト</sup>ある者と信<sup>コト</sup>ひありしもの所<sup>コト</sup>物<sup>コト</sup>て  
侍<sup>コト</sup>の圖狀とあるもの且問ひ且訂<sup>コト</sup>して遂に板  
十圖を成すは是を以て毎條下の添へ指<sup>コト</sup>と大  
要と爲るふ似たり然れども是皆<sup>コト</sup>生<sup>コト</sup>形<sup>コト</sup>正<sup>コト</sup>圖<sup>コト</sup>を  
あし<sup>コト</sup>し固より唯<sup>コト</sup>を畧<sup>コト</sup>と知<sup>コト</sup>るふ是<sup>コト</sup>しめ<sup>コト</sup>ん<sup>コト</sup>た<sup>コト</sup>なり

又編中間の付録せる所の地図を改訂換へて以て  
補入せるものありされ諸を象形カメチをすまきハ能く  
其傍む人として亦其大略を現今せしめんを  
欲しそなり但し衣被國等の如きハアラ帯朱の生  
物を寫生せざるなり

一 茂英 他ノ草案を披ひて編集の業を起さんとし  
弘強々筆記するものと 茂英々 記するものとの對校  
するも前後錯乱冗長重複を免し殆ど筆を建タテ  
アトサキ イリミタレ クドク フタヒニナリ

雜事り如しされ其間の日次等を立て及て問を  
起し及て記するもの或あるも注ふはるるも  
觸れ他に移りしもの多かりしを遺忘と恐れ上下  
縦横ふかきみませしうあるも今務めて彼等とを前  
後錯置し繁を省き遺せるを補ひ草稿するもの  
再三ふ及び紀行の日曆を以て淹留中見せし  
といふもの假しふ門と立類を以て漸くおしそ  
日を主ぬ月と果ぬ朝子校し夜ふ以て終る編考を

おせりゆ左の如し然れども一取ておれとよめいし  
衍文 宣復のるる失少くは幸お若しふまをんるるを  
カキスゴシ ジウケンニナリ アヤマナ  
希ふのこ

一天明甲寅は伊勢國白子に舟子大黒菴光を  
おるもの彼魯西亞國の屬島アミヤーツカと  
いふ所漂到し仙臺の漂民列せしカンデーイ 彼中地ふり  
帝都ふり原路をりて我般夷地を經て寔  
モトノミナ 政壬子の年松前より海船を是我島の人歐羅巴海  
おかり海船せし始なり

此者等り漂流の始末を記せる時おその流布する  
もの有り 茂葉 一は畧図をばて藏する物もありて  
稍と地畧を記れり且近方又一友人の宛ふて  
たふし光を更ふ通達するもの一は合新おす所の  
ものありあり堂々新聞とお合をて本編を授する  
もの有り本編中光を更曰又大光説と旁注する  
ものありあり

一又 茂葉 其事業和蘭の醫籍翻譯を從事するもの

年ありよりして其書を渉獵するに際して彼著撰  
中坤輿の圖説を参考するより可なり少く地理  
方位を知らざるあり又門人某ある者其地理を  
毎するの學志等々新譯の著書頗多し其類  
毎に校讎して其一斑を曉りて可なり是等を  
以て源を究むるの事既に耳目に觸るる物も  
お合はるるの少ありは故に又或は彼を誤り  
志す可き處を正すも且つ其も亦ある事あり

依て其書にすまきのもの、説の例に注記傍し  
讀む人の便りあり志すべし其大なる事あり  
彼ら説のいふこと、能く解す處あり  
り多きあり敢て蛇足を添ふるあり

一因ナシ曰此大地世界の自ラ四大洲に分ちらるるものなり  
遠西の人四方に航海して其理を究めし其  
唐山あり明朝の末より西洋人内地に入て  
其圖説を示し人始て之を知りて曰く四海とい

一曰 アジア 明人亞細亞 又亞齊亞と音譯す

此大洲を係るものハ 西ハ 亞蠟皮亞

百爾西亞 ペルシア は方ちてハルシヤ イニデア 應帝亞 は方ちて天竺

東ハ 支那 シイナ 唐山あり ハレハカラ、モロコシ 鞏 唐山の北の大國なり 今の清朝の起りし

鞏地の部ハ唐ハ屬し 北ハ 止白里あん と稱する所あり 魯西亞の領地とあり 魯西亞鞏鞏と云ふあり

朝鮮 我日本 琉球 等あり ハ 往來を内收む

女直 屬島 ハ 呂宋、阿瑪港、咬啣巴、  
臺灣等あり ハ あり

二曰 アブリカ 明人亞弗利加 又利未亞と音譯す

ハ大沙ハ係るものハ 厄入多 エニット 巴尔巴里亞

亞昆心域 アビシニイ 工鄂 コンゴ 喜望峯 カイゾウ 等の諸島あり

屬島 ハ 福島 ハ 麻太 ハ  
曷斯加 ハ 等ナリ

三曰 エウロツパ 明人歐羅巴と音譯す

此大沙ハ係るものハ 入尔瑪泥亞 ゼルマニア

法蘭得亞 ハ 又和蘭 喝蘭 荷蘭 ハ 拂郎察 フラン

意太里亞 イタ 伊斯把你亞 イスパニ 波爾杜瓦爾 ポルトガ

魯西亞 ルシ 一名没斯哥未亞 モスコ 弟那瑪尔加 デナ

漢アンデリア又イギリス利亞

諸厄利亞に於てハ  
歐邏巴の大島あり

等の諸玉なり

四日 アメリカ

明人亞墨利加と音譯を此洲南北二大  
洲に分ち南北兩洲と算されハ五大洲なり

此大海の係り南海の在るものハ

伯西兒

智加チツカ 等チツカ 其チツカ 教チツカ 玉チツカ あり 北海チツカ の係るものハ

墨是可メキシコ

新拂郎察ハフランシス

加里伏里泥亞カレホレニア

等の諸玉なり

南の海は屬島懸し北の海は南北は屬  
三百年等ハ歐邏巴海より開きたる土地と云

此四大海の圖記明の末漢字の存せる輿地全圖

ありしハ物あり又職方外紀を以てして譯記

の書中にも載せり又和蘭船

本邦の齋モタラシ一乗の地球并大地總畧圖の註

諸島不爲する物多し 官庫ハ大小地球并  
地球圖記を多しといふ

又近來其の流布する新製地球及世界圖も皆

此四大海を分てるもの多し是は彼の源流人を

初より彼二大海アジア、  
アフリカの海陸を以て

今く五大海を以て經歷せり定まらば其畧數

萬里外四面の環海を一周して海船せる事

なれを預めは昔より四大洲に分てるを知り  
る形編を讀むの先務とすふふれは茲に附記  
一此源流の紀すは我 國の人魯西亞國に  
又其ふよりなるこの保護送を以て改稱せしむ  
なれは預め先づ彼玉のふを知りて是をよきこれ  
荒洋とて曉りしは魯西亞國の本上ふいふ  
歐羅巴洲に屬せるの地なり古今彼我は諸説を  
考ふるに我ふてオロシヤといふ名は近き安永天

明の頃より地は何處の方角といふ事とて每に諸  
人々にふするものなりしは是より百五十年も石印を以  
てふよりいふムスコビヤの事とムスコビヤハ白石翁五事略  
小日本を去るるを歩四千里餘程とあり 明の末ハ  
莫斯哥未亞と音譯を職方外記并白石先生未覽異言ハ略説あり  
近來 義魯ガ星とては海ありし増譯重訂未覽異言ハ洋説あり  
参考考しては 此玉皮草ナメシカの名あり蜜蝋アキヒト此土産を我  
邦に齎モメラし是より土産を以て 賈人草アキヒトの名とす  
故に世に草の種類 中略 朋乱 小作 爲んてん。小人。を信也。



あまうを。と呼ぶるや又むすびやと稱するあり  
即ムスコビヤも草品の一名ありし地なたるるの  
知くさる者あり此ムスコビヤハ都府の名ありて  
今抄の總名とあるとそ越州の本名ハリュミア又  
オロシイア又オロシイスコイともいふよし  
明人魯西要  
音譯也  
此玉右ふりし歐羅巴洲の西北ふありし王國なり  
百有餘年未彼土の賢主某ある人與りて諸  
邦を懐け服従せしめし東北方亞細亞沙止音

里<sup>支那韃</sup> 韃<sup>韃</sup> 乃諸大玉其を倭せし其<sup>ハテ</sup>境カミシヤ  
ツカふ玉る終つて近時我東北蝦夷諸音ふも其人  
未だ享保之文の以よりや相前地方の人  
彼等を指して<sup>下カエダ</sup>赤蝦夷赤人と呼ぶ是は彼人の中  
緋羅紗撰緋緋の敷れ若くは若多きを以て  
こゝろふいひ初めしものなり  
たれと交付し思ひしは思ひし赤  
をそとに名ありしと云  
恐ろしき鬼人をもあやと思ひしは是は蝦夷にも人類の  
外なる者の振もんは是を其の地に入りて赤人赤蝦夷は  
ありては彼地獄の繪ふえし鬼人をいふ 然るに漸く此人  
類のたれと云はれ候ししもありたり

魯西亜人なるものと信ずるはオロシヤと轉訛し

ヨコナマリ

唱へ又ハオロシヤと何となく呼ぶものとありしハ

三十有餘年前後の事ありしハも是レ其本玉いそ

万有餘里外れ地なりしハ今ハ亞細亞の東境

ふるまふと申領ふかハ東北蝦夷の東境なるをいふ

掠畧し侮せ有つものもあれハ知れ議す遂に

近隣の本をとり我境界より海上十日とも経す

シニサカイ

して至る事近地と云ふ事ありしと扱は度の漂流人

最初ありしハあれハのありハ程隔りある僻地の

境なりとも彼属島とありしハ是レ忘せしあれハこそ

留玉の縁も出づる處し左ありきいそ生僻島

より留船のふも多し不幸申の一幸ありし

其領ありし地なり彼亞細亞本領の内地

連つ海に國すも漸く歐羅巴ある王都を

其領内の直径ハ凡そ幸の便道ありて使節

多し厚く時長く多し如法四大海を環海し不

思儀おしめてお土へ帰給はせし也 其の地理志  
ありて外域の事とも知り得んと只お東も徒ら  
國記をえて玉躰を遙おする事なれしを我  
卿乃人なりすも親く其海を親<sup>視</sup>物目睹し  
東も我彼を詳不知る事なりといふる事  
お親煩と厭はず詳不問以精しく撰て紀す  
置<sup>ミン</sup>ちるが事<sup>ミン</sup>好<sup>ミン</sup>あのみ<sup>ミン</sup>あ<sup>ミン</sup>き<sup>ミン</sup>然と<sup>首</sup>我<sup>等</sup>我  
國恩を辱し 公命の各海あらん事とおふし

鄭重に窮詰する 所以なり

我方の人多し、かく朝せん天なく、なすいふ  
の事知りて志する事お於て、間或、碩學  
者儒といふも毎する事おほし海外四造  
にお許<sup>フコ</sup>多の諸大海玉土ありて列居する事  
を、知る事お、吹ゆ凡その人、固より恬然  
として是を省き、深く心あらん人、  
域外邦といふも、務て其國情俗尚を、

一 和氣其多と講し置るはるの如き不海  
外諸島の方位と風地形の廣狭肥瘠地  
海道里のちを近氣候の寒温物産の怪奇  
人教の多寡厚薄政教の邪正各土乃  
治乱與亡隱め知て不虞をすこし事今乃  
謀とやふ事いふくもて今なきものあれた  
今ありて古なきものあり今を以て古を  
編すくは古を以て今を語らるは是我

ヒロセマ トチムヨシアヒ

カニルトホロルト

フルヨノ

邦立穀豊饒。五金富厚。物力の充足十全あり

ナニゴトモ ミチタレルヨリ

より他を顧る不及とさるるは因せざるありし

ヨソノコトヲカマシ

ナニミヨル

然れども常ふ公くは是情可成きものありや

此是編ふ時々さるるは似て大關係するもの

ガホキニカヘリアフ

いさうとさるるは似て大關係するもの

一 扱此度源を魯西亜都府印行する所の世界

方圓ふふせもの四枚  
地球の四面を扱  
を扱す

浄説と評して名を上げしは 前集 編集の巻末と

あつて、發下せしむる因て、これを圖するも地取  
度格、略記すべし、其の諸海各土の地名を  
記すも、あつて、彼邦異字殊ふは、格取の文  
あれ、て、後て、是を解すべし、これ、永く、公庫に藏  
するも、亦、物、社中好事の一書、生、世、を、彼、大、光、  
書、記、せる、彼、西、の、字、體、配、額、を、略、傳、する、者、あり、  
あれ、亦、發、賣、の、門、下、に、屬、せる、者、あれ、は、生、を、  
彼、地、名、未、を、後、し、の、原、圖、四、幅、の、模、寫、圖、中、に、我、西

字を以て、亦、く、解、記、せし、の、印、是、を、原、圖、に、添、て、  
上、圖、球、の、圖、も、亦、同、く、  
解、記、し、て、亦、あり、、取、つ、て、是、を、一、説、せ、先、に、滿、洲、界  
を、自、ら、四、大、洲、に、分、て、る、亦、を、辨、識、し、又、今、夜、の、海、を、  
四、大、海、と、通、應、せし、道、程、も、分、明、を、得、し、是、を、  
古、大、海、と、傳、て、常、に、海、外、諸、國、の、方、位、遠、近、を、知、せ、  
る、の、取、り、あ、り、一、圖、籍、あり、  
一、本、新、日、中、渡、海、の、海、程、大、に、世、界、の、圖、中、に、あ、り、  
朱、線、を、引、き、日、曆、を、記、せ、り、亦、體、彼、船、中、に、案、針

彼の某ある者其稿を留中源ある等々為し記して  
彼等亦ありといふ右の模圖并ふハを併せ寫して  
なほあり時ふ内寅の秋 堅田彦は原國全幅  
を我 公亦信し其の以 涉字を司天臺曆  
局間重寫ふ亦す重寫されと聞しその涉字  
日曆を精思熟考し遂に譯字をかし別ふ  
總畧今圖を製し其格内ふ右の涉字日曆を  
譯記詳解す其考定の織惠明傳ある其經

過の道程始て了然あり按成て即是を彦  
進呈すといふ他の彦原圖を還し其曆局新  
製考定涉字全圖を併せ我

公亦送し 公一覽 命し其れを抄寫  
せしむ抄復紙を再校をなし功竣つて又これを  
初の存し寫し其圖四幅を添て奉りし  
其ふと幅とありは考定新製圖ハ我輩為今  
紙と為すし其物之字亦本編と讀むの際

照し合せて其道里終廻の次第を明白にする  
の事少ナカシキものあり

一 茂興 宣富と交遊年あり 近以古新製國原稿  
を以て 茂興 小宗す 茂興 幸ひふされとて己ふ  
甲子のイギリス 出帆海の海上征伐と校合し  
因て亦發揮する事少ナクして 其時  
を以て 殊に舟と交せし 濠の 名漢又利亞  
を「ハムト」といふ 大港あり 加那里亞ハ「テネリフ」

一 亞墨利加の 伯西兒ハ「サン・カテリニ」 又「マルセ  
イス」 サンドウイク」 等あり 其考を以て 本  
編毎條下ニ附記せり 海路記曰云々 是レ

一 崎鎮肥田豊別藏ナカサキブンキョウ 小魯西亞本領全國一幅  
あり され亦本印板の物ありて 甲子の秋 船  
上するものと云 豊安されを 和名 福司 命し  
得せし 其様國地名等 國字を以て 記せるもの  
成れり 留府の後 亦本と模寫との 表圖を備

其 聖田彦の見込書不供ふ彦と聞て存  
轉借して我 公不送る 公一読亦これと借借  
して前賢の属せしれ契問の料とあさしめ且  
騰寫して紀伊編纂の一考ふ備へるを命  
せしめ是丙寅初春ふ 何れ 前賢と交てた書と檢  
閱すふ本願新定諸島の以細と表しし物  
又ゆ仙臺船前初源忌世カ オンデレイツケ等の  
名に舊板地圖見ふふかし 此圖と認めしは諸島

不在ふゆをり 道なり 近年本なり 開拓 トッヒラキ  
地あり也其に東あり舟船絶て即しるるの海をの  
一画を山とてあり 但是に其教在の諸島并源あり  
等能能し東あり名をえす然れ共光吉更に源忌  
せしアミチヤツカの名えゆれは是を散在の諸島  
中より必せり 一日これと源あり等ふ示して問  
以紙すふたふ圖其諸島中より物ひかし  
其名の如き一畫を記せりとのあるし云是



を中編参考の下あるべきものを原圖に會て  
其後人の譯せる國幅と繪寫し

公命ふ應ず

一亦存亦 望田所全幅を以て唐局間氏より  
間生是と 然れしを以て 倭人の訳物より  
多しと書きて是を以て 彼國字と傳へて 然せる者  
あるものとせば 一日彼と名し 地名と 記せる魯  
西亞文字と讀し して 新なる改譯せるもの其なり

あるに於て原圖を繪して全圖を模寫し 度格を設  
けて各土を玉字もて 譯語を施し 國中郡府縣  
邑の記號等ふいふを 精細に考定し して  
譯例一冊並に圖面里程度尺等を記し して 卷  
附するに依りて 彼譯說の精粗始て 判然とす 他  
亦これと我 公ふ 示さる 命せし 事  
復ふ 是を 模寫せし 事 然て 是を 然國  
す 前記の 事 和名 呼ぶ 諸玉地名を以



騰寫して奉るす國中符牒ありうかす其  
附記ありて其詳を得べきもの也他日これを以て  
附るせんす是亦源を都府の記話と保せ之  
際その概をたふすは是も物あるし

本編史記癸丑の年出帆難風吹流され空鶴  
亦源をせしし初より其より魯西亞國中地を令  
イルコウツカといふ所数年洋をせり法記信子  
申す大の苗在久しきを以て又覺一歩智以

し事終りれば假りか語を分ち門とてし紀史教  
篇をありまよりあつて費し教へ今何れ海流  
教篇月文化之年甲子の秋我老病ふ至るまで  
紀史を終りて亦源拾四巻をありし又右門類中  
分ち金ころし紀雜事をあつて末篇とあし  
通計拾五乃巻とありしこれを以て松式箇年  
束の畧史紀事早きなり

一難民固より野陋無識の舟子ありて数年彼地ふ

在りし事も耳目の所見ふんをく且彼人も固  
より彼等を宿客を以て待つものふあきこれ  
生命をつやく事程お應の棟懸格育あり  
あゝ八箇年の百チウゲンゴモノ奴隸の如く殺せられし  
又申されどもあきし志れし中等より以上の  
事々疎漏あり又ふまゝ見せしむる如きも  
無識無稽ありし能くその情を表す言や  
なほあはれは紅雲を待て今く彼を何事の心を

若しやといふ處に又たふ録せらるゝのかあし  
彼等々是邊の所獲るる多かりし武ノコレの諸男等  
の所獲りも多し又彼等が遺漏するも少から  
ましとて唯彼土の一掃をえり物といふし  
一奇條ふしつらぬ中編毎の今後せらるゝの雑録  
をれも毎條下中附記する如く今度の漂流  
海難の事古今未嘗有るのみ也此中南北極下  
近き氷海ふりし北極下ふりし海をいふ院ふ

月のありし海水の氷が堅りたる氷山といふものなり  
又南極より北緯六十度前後の海上を至りし  
已に又北極より入るる事南北極と極と距離事  
甚き事極下より身をもちぬす一皮ありす  
其回を至りしもの不思議を始りて又又其  
反對せし赤き直下酷熱の海上南へ距ると西へ  
距るとの所を再びを行くこと極初の内居羽衣  
より土室氷室の奇々怪々なる海濱の地を

屋宇必ず火温を用ひ雪舟の如き旅面を覆ひて  
イノソチ 足と裏み常より皮裘をカハコロモ 衣て寒不可堪し其靴もすれ  
手は寒凍ししコハ 脱履ヌゲガキ する程の厳寒あり多し夏  
寒きの地は恒し又或ハ赤身裸體マルハダカ 日夜河海に浴  
しし如しの暑を避るるといふ程の炎熱夏有て冬  
あはれなるも至りし其の人類ハ甘解種容貌  
言語も多異あり其の會合せし中ハ人黑人長人  
マルケイサキ 長大文身人 ヨミホシ の類ハ吾人如漢諸書稗官ハ記の類

おも載せし國記のこは見せしこの名人を親視應  
接し又彼を運りて大を供する馬の如く雷車  
と牽りたるの奇術又我が所のこはし空中を去りす  
氣船を一見し或は海獣の宝品と云能と云能  
を見魚を見鱧と云能飲食ハ生ける牛の乳汁を  
飲之又ハ生ある椰子を食ひし等其食宝味を  
嘗めしの数事其物こ一として其あしるものあり  
身を飛し目をとるすその新語新法在り地

北亞墨利加洲の属をいふ始り亞細亞洲歐羅巴洲  
亞弗利加洲南亞墨利加洲の五大洲方を遍歴し  
て地球の四面環海一周し其海九千里を凌ぎ再  
我東方に帰朝せし其代未嘗未曾有の一大奇  
事ありて上下古今割判三千年來絶て無き所の  
奇術を其間あり ヨカヒラケテ 命を乞はば編環海空閉ト影  
せしもあれは也

一我邦四面に海を受し國あり沿海の舟あり航す

此の外域より山に漂到する者多く唐船或は洋船フランゲスネの獲送を以て海船に其字を稱説を記すせる物多し然れども其に唯更細亞湖方一海申の一屬地あるを以て唐山安南を以て支那南海印度諸島等も漂到せるの類は取を去て僅に數百里の外に出生る近傍の字を以て取れるの也今度漂流の往來の由り西より南又西又北數千里の距離を以て遂に我より東歸する道程

海後の奇説を因尋考漂流記と目と同かして  
怪人ヤ

一前考より如く毎條諸説の内嘗て奇異等々他の視聽する所未だ符する物と云ひしもの傍に悪梅評説等を加て本條を以て人として即ち其あるべき附記しよりあるべき教養せる物とすもこれ亦的考あるや否を志す  
一毎篇毎條附記悪梅の諸説を復鄭重すべし





二字をよすれ、自ら、生音出る、如し但唇聲の間  
おあろのこちり、引呼なり、コー。ミ。と記せるの  
教をり、あれ、コウ。ミウのウと混する、た、ツを右  
側、ハ、書する、キ、カツ等、促呼する、の、ち、り、又  
半濁音ハ字の右、頭、ハ、〇、是を記す、プ、ゼ、の、ハ、濁  
音ハ、を、用、ゆ、生音、出、を、假字、ハ、書、する、もの、大  
抵、<sup>レ</sup>の、勾、畫、を、設、く、これ、上下、の、文、ハ、混、白、せ  
し、め、さ、し、る、もの、也

一、本編中羅旬語云々と知するものあり、羅旬ハ  
西洋言語の由ッて起る、ものを、此、古、今、今、  
於て、歐、羅、巴、洲、中、諸、國、通、用、する、もの、なり、傳、は  
後、方、記、せる、書、ハ、學者、ハ、何、と、され、ハ、解、し、か、し  
し、り、但、名、物、の、稱、呼、等、ハ、總、ハ、通、稱、年、久、し、き  
故、一、言、一、語、ハ、知、る、者、あり、し、ハ、恐、ハ、エ、ク、トル、道、  
羅、旬、後、ハ、記、せる、教、を、り  
一、魯、西、亞、國、字、總、計、三、十、三、字、様、行、た、後、なり

たれをオロシイスコイ アツブキといふも我方は  
はといふやめし和漢文字の似て字體を聲すは  
實に日字數も多し漢字四人の内を一人并  
習ひはる者少しあるは後之類も再々是て  
同の志するものありて遠く多かりしと思ふ  
ペトルブルカをビゼルボルカ「ペートルガラ」をバウラ  
ツケガツ」と是遠く類く光を更ハ既ハ文字をも  
習ひ文け事し其彼之後も亦て書き是

らありといふれハ其後記せるもの百分の一といふも  
大いなる強りなきものと云ゆ中編分類中文字  
學之類等の門ありハ彼等ハ其の習ひ事なる  
有之彼等ハ著學文字の諸科種々あるものと  
少由嘗て光を更ハ傳へ事し文字楷草とも  
いふ學に二體寫し置たるものをたふ寫して  
情物のつふ傳すたふは彼印板世界圖本  
を以て文きて能せるなり我國字ハ換て得せし

體又一

<sup>ア</sup> <sup>ベ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>カ</sup> <sup>デ</sup>  
А а Т т В в Г г Д д

<sup>エ</sup> <sup>セ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
Е е Ж ж З з И и

<sup>カ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>モ</sup> <sup>フ</sup> <sup>ペ</sup>  
К к Л л М м Н н О о П п

<sup>テ</sup> <sup>ス</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>ス</sup> <sup>ハ</sup>  
Р р С с Т т У у Ф ф Х х

<sup>ツ</sup> <sup>シ</sup> <sup>キ</sup> <sup>シ</sup> <sup>エ</sup>  
Ц ц Ч ч Ш ш Щ щ Ъ ъ

<sup>ヤ</sup> <sup>フ</sup> <sup>エ</sup> <sup>ユ</sup> <sup>ヤ</sup>  
Я я Ы ы Ь ь Ю ю

Ю

魯西亞  
國字

<sup>ア</sup> <sup>ベ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>カ</sup> <sup>デ</sup> <sup>エ</sup> <sup>セ</sup> <sup>ツ</sup>  
А Б В Г Д Е Ж З

<sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>カ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>モ</sup> <sup>フ</sup> <sup>ベ</sup>  
И И К Л М Н О П

<sup>テ</sup> <sup>ス</sup> <sup>テ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>ツ</sup>  
Р С Т У Ф Х Ц Ч

<sup>ツ</sup> <sup>シ</sup> <sup>子</sup> <sup>井</sup> <sup>任</sup> <sup>エ</sup> <sup>ユ</sup>  
Ш Щ Ъ Ы Ь Ъ Ю

<sup>ヤ</sup> <sup>ヨ</sup>  
Я Ю

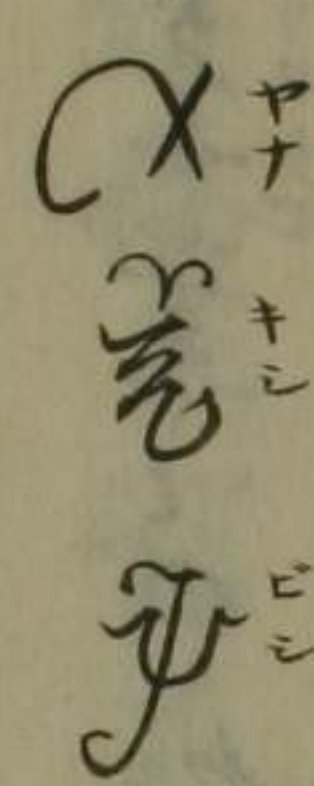
るハ模写圖のナリ

按  
シ又作  
シ

以上ノ二體共ニ三十三字ナリ但其行草ニ似タル體ハ其内ニ異體多シ右ノ如シ

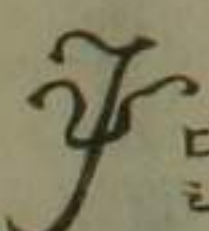
一和蘭ノ書ニ曰ク魯西亞ノ文字ハ其始ハ斯刺勿泥亜ト厄勒祭亜トノ二國ノ文字ヨリ出タル者ナリト云リ斯刺勿泥亜ハ古ヘ魯西亞ノ始祖出生セシ國ナリ厄勒祭亜ノ教ハ昔ヨリ今ニ至マテ魯西亞人尊崇スル所ノ者ナリ  
按ニ A Γ Δ E I K Λ M O Π P T Φ ノ十

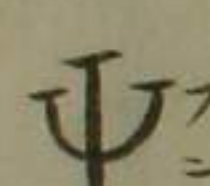
三字其體ミナ厄勒祭亜ニ同シ

一又  ノ四字アリ其用ヲ詳

ニセズ其楷書ニ似タル體亦詳ナラス魯西

亞刊刻ノ諸地圖ノ内ニモ此等ノ字アルモノ

未タ見ス而メ右ノ四字ノ内  ハ則チ厄

勒祭亜ノ  ト云字ナルヘシ然ル片ハ此等

ノ字モ亦魯西亞ニアリト雖モ其國語ニ用ユル

ト少ナキニ因テ畧ス者ナルヘシ  
和蘭ノ書魯西亞所用凡四十三

字ナリト云フ見ヘタレハ此外猶尋常ニハ  
用ユル少ナル者尚数字アルベシ

一 本編乙丑の案抄問を以て丙寅二月の中旬

小終りニ臣退いて弘強は月より編集の字

を起し前集修り再校増訂し其秋小終

弘強祗役の任果て中府より稿を以て前集

小属す前集亦小紀史する雜記教編あり

官務と前集素業との解間彼と是と比較し前

後ゴホウコウ轉位錯置しリヨウジ次第を立ヒキアハセて附記参勤等アテラコテラトイレカ

小日を積之又新ゴホウコウ物品法圖を作ヒキアハセらるる或ハ

地圖の教幅をゴホウコウ得せしむるの會議ヒキアハセ経渡ヒキアハセのり

如ふき小月を累ゴホウコウ給あり如新編修の業ヒキアハセ忘ヒキアハセらる

うめしとしゴホウコウせむとヒキアハセたむとヒキアハセるヒキアハセ前集ヒキアハセう才ヒキアハセ浅くヒキアハセ業

短くゴホウコウ於丹ヒキアハセ小一年を起ヒキアハセてヒキアハセ今年ヒキアハセの初夏ヒキアハセ小終

て稿をシタアキ脱ヒキアハセはるるヒキアハセのりヒキアハセなりぬヒキアハセ春愚ヒキアハセのヒキアハセ官ヒキアハセ赤ヒキアハセ心ヒキアハセ

にヒキアハセ選ヒキアハセ小過ヒキアハセひヒキアハセなり

命を合ヒキアハセんてヒキアハセ絶域ヒキアハセ九千里ヒキアハセの地海形ヒキアハセ孫風俗

事態較くの音記称海居恒きくるといふん  
歌して致す魚うきうきうき後子向ひ坐イナカラお  
歩きくも恐れ多くもあつても昇平の法代子  
重ひまや張之本面白ひきき微臣うきくひき  
今ふ始ぬ恩澤の波及せりふ出さる限あき  
幸あつて唯遷延運後の罪逃るへうは全  
編り上の目方たれ近侍よきふとありやうむ  
うらんゆくと希ふのみ

文化四年丁卯初夏

醫臣 大槻 茂質 謹識

彼必事本編の註載すうきうきものふふ  
窮詰せし数件あり亦臣う書て歩之置  
きうきうきとあ合する法説と採録し  
数十葉子巻一冊とあすたれ北巻の採事  
たれに敢て 公家の秘笈とありあふ

るりと欲し己の丙寅舞馬の尼後三休の  
ドヨウチウ  
日狭隆の殿宅銷夏の万雜録ヤケにて其秋  
たちの侍臣某等チヒダを著るものとすぬ  
是れ多くも其同編集の  
命を著りし寸衷の微志なり

目次

卷之一

寛政五年癸丑石巻出帆後發舟の  
数ヶ月漂流し甲寅六月オシデレイツケ  
としかる山も漂流しナイツカといふ津の  
まき年ふ向んといふ津留せし記 三國

卷之二





服飾

第三

廿四

卷之五

寺觀道教

第四

產育及赤子命名

第五

六圖

婚

第六

卷之六

葬

第七

祭

第八

衙廳並官名職掌政治兵卒武備

第九

刑獄

第十

錢貨

錢鈔

第十一

三圖

卷之七

尺度并里程

第十二

秤量

第十三

樂器

第十四

五圖

氣令	第十五
耕農	第十六
交易	第十七
醫療	第十八
物産	第十九
數量	第二十
土俗風習	第廿一

卷之八

言辭

第廿二

天文	地理	時令
人倫	身體	居室
動物	器財	衣服織段
飲食	言辭	二圖

各門譯語並名物ノ解其下ニ釋セリ

卷之九

癸亥の年三月壬命下りて拾三人の者

イルコーツカ出立七千里の道中へ首途し  
舊越ハスクツを経て新都府ペトルブルカに  
到りてその年の記并旅館停泊中の記  
これ享和三年也

卷之十

國王は目見心珠の次弟を以て都下巡遊  
乃記 六圖

卷之十一

都府停泊中の記二

はあや 癸亥 儀平等四人の者日本  
使節船同付の船すき旨午後さき  
出立してカナスダといふ港より大船ふり  
紐巻の記 九圖

卷之十二

六月十六日カナスダ出帆茅那馬ルカ  
諸厄利亞に舟と泊め加那里亞嶋に船と

寄せまより赤道直下の海上を經過し  
南<sup>アメリ</sup>墨<sup>リカ</sup>利<sup>カ</sup>加<sup>カ</sup>洲<sup>カ</sup>伯<sup>ラ</sup>西<sup>シ</sup>見<sup>リ</sup>の月<sup>カ</sup>エ<sup>カ</sup>テ<sup>リ</sup>ナ  
濠<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>島<sup>カ</sup>岸<sup>カ</sup>の海<sup>カ</sup>路<sup>カ</sup>及<sup>カ</sup>目<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>停<sup>カ</sup>留<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>帆<sup>カ</sup>て  
其<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>岬<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>宗<sup>カ</sup>興<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>西<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>向<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>  
を<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>記<sup>カ</sup>

卷之十三

甲子 文化元年 四月下旬マルケイサといふ裸<sup>ハダカ</sup>  
を<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>舟<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>繋<sup>カ</sup>ぎ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>費<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>再<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>

赤道直下を西に距りサンペイツケを山と應  
まより北<sup>ア</sup>墨<sup>リ</sup>利<sup>カ</sup>加<sup>カ</sup>洲<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>存<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>更<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>亞  
海<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>魯<sup>カ</sup>西<sup>カ</sup>亞<sup>カ</sup>領<sup>カ</sup>分<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>盡<sup>カ</sup>境<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>ミ<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>ヤ<sup>カ</sup>ツ<sup>カ</sup>カ  
といふ濠<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>七<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>初<sup>カ</sup>旬<sup>カ</sup>島<sup>カ</sup>岸<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>路<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>  
同<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>敷<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>逗留<sup>カ</sup>用<sup>カ</sup>意<sup>カ</sup>整<sup>カ</sup>以<sup>カ</sup>八<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>五<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>帆<sup>カ</sup>  
般<sup>カ</sup>夷<sup>カ</sup>地<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>東<sup>カ</sup>南<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>洋<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
渡<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>薩<sup>カ</sup>摩<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>向<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>九<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>初<sup>カ</sup>旬<sup>カ</sup>船<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
長<sup>カ</sup>崎<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>津<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>記<sup>カ</sup> 五<sup>カ</sup>圖

卷之十四

長崎港入船上陸後の次第表乙丑文化二年

三月の事終りし傳九迄の記

卷之十五

往來滞留前後の事乃雜事

總計拾五卷 卷首序例目次を巻

共拾六卷圖一百十五

長崎改五年癸丑至文化三年乙丑

拾三年とある也

長崎改五年癸丑至文化三年乙丑

